

台風19号と大雨の影響のある水田での 令和2年産米の作付けに向けた技術対策

令和2年3月3日 福島県相双農林事務所

昨秋の台風19号や大雨の影響で水田への通水時期が不明となり、本田の作業（代かき・田植え）の時期を遅らせなければならない地区が出てくる可能性があります。水田への通水時期が遅れるような場合には、今後の情報に注意して作業計画を立ててください。

● 当面の技術対策

(1) 水稻育苗に向けた各作業工程の見直し

通水時期やほ場の復旧工事により田植え時期が遅れる場合は、育苗作業（種子予措・浸種作業・播種・育苗）の時期について見直しが必要になります。

工事終了や通水の予定時期から、代掻き・田植え日を想定し、浸種～移植までの作業計画を立ててください。

育苗様式別の播種量・育苗日数は、表1を参考にしてください。

例年より気温が高い時期の育苗になるので、育苗日数は表1の育苗日数より短くなる可能性があります。

	箱当たり播種量 (g)	育苗日数 (日)	10a当たり使用箱数 (枚)
稚苗	200	20~25	18~20
中苗	100	30~35	30~35

【育苗様式を変えて対応する例】

- ・稚苗200g/箱播種の場合、4月15日播種・5月5日移植（20日育苗）となります。
- ・中苗100g/箱播種の場合、4月15日播種・5月15日移植（30日育苗）となります。

(2) 浸種～催芽

浸種は水温が高いと発芽不揃いとなります。網袋に余裕を持たせ（右図1の「改善の例」参考）、水温10℃で10日間、15℃で7日間、浸種後3日目からは1～2日おきに水を交換してください。

浸種期間を延長している場合は、発芽しやすくなりますので、催芽温度（28℃以下）と催芽状態（図2の鳩胸状態を参考）に注意して、根が伸びすぎないように注意してください。

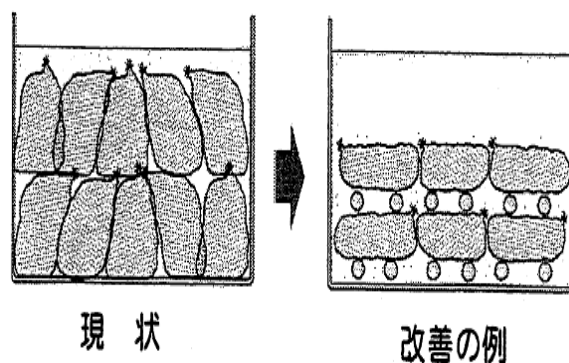


図1 浸種作業（右の改善の例を参考に）

※例年より作業を遅らせた場合、気温が高い時期に浸種等の作業を行うこととなりますので、水温上昇による芽の伸びすぎに注意してください。

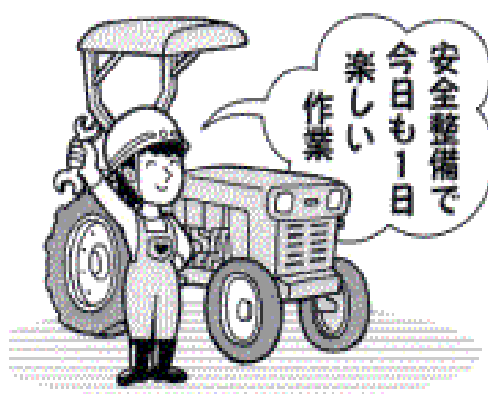


図2 理想的な鳩胸状態（左）（星川）

(3) ほ場の準備（畦畔の補修）

台風等の影響等により畦畔が崩れている箇所も見られますが、ほ場の内外や農道等に亀裂や崩れ等の損傷がないかどうかを確認してから、安全に作業（補修）を行ってください。

ほ場の内外の状況をよく確認して
安全に作業してください



(4) 基肥・カリ資材散布の注意点

通水が遅れて代かき・田植えを遅らせなければならない場合は、基肥や放射性物質吸収抑制対策のカリ資材の散布も、代かき・田植え作業が可能になると判断された時期にあわせて行ってください。

例年と同じ時期に散布すると、代かき・田植えまでに日数が空いてしまうことになります。

特に水溶性の肥料成分は水に溶けやすいため、代かき・田植えまでの間に脱窒や流亡によって失われる可能性があります。

(5) すでに浸種を開始している場合の対策

浸種を中断して軽く水を切り、ビニル袋に入れて大型冷蔵庫等に5℃前後で保管するか、冷水（10℃以下）にて浸種を継続し、水の交換を行います。2週間程度は保存が可能です。

もしくは、脱水機等で脱水してゴザ等に広げ2日間程度陰干しします。その後網袋に入れ、風通しの良い日陰で保存します。

保存した種籾は、再び浸種すると芽が動きやすくなっているので、籾の状況を見ながら再び浸種期間を調整します。

すでに芽が動き始めた種籾の乾燥保存は発芽率が低下（特に芽の長さが1mm以上）するので、乾燥保存は避け、5～10℃の低温で保存してください。

(6) 育苗期間が長期化した場合の注意点

例年より気温が高い時期に育苗することになるので、ハウス内の温度はこまめに管理（ハウスの裾ビニルの換気等）を行い、特に急激な温度上昇には注意してください。

また、苗立枯病や苗立枯細菌病等の病害の発生には十分注意し、発生を確認したら早めに防除してください（細菌病が発生したら薬剤で防除することはできません）。

育苗日数が表1の日数を超える場合は苗が老化しますので、育苗箱への追肥も必要となります。